

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第6回 「三昧無碍の空ひろく」

今回は、「白隠禅師坐禅和讃」のお終いから6句め「三昧無碍の空ひろく」(注)をテーマに幕末から明治に生きた「剣・禅・書の達人」山岡鉄舟と、同時代に名人と称された落語家、初代三遊亭圓朝の逸話を話して貰いました。

「三昧」は、もとはインドの言葉で「サマーディ」といい、何かに精神集中することをいいます。精神を統一する全ての禅定(心を一つの対象に注ぎ、正しい知恵を起こして対象をみることを三昧といい、禅宗では坐禅を「三昧王三昧」(サンマイオウザンマイ)と呼ぶそうです。また、三昧、禅定は仏教の目的ではなく、それらを通して、悟り、心の安寧、安心を得て、「私」(我)がなくなる、もともと仏であったと気付くことを目指すのだ、ということです。

明治の始めころの山岡鉄舟と初代三遊亭圓朝との逸話です。

あるとき、鉄舟が名人の掛け声も高くなった圓朝に、子供の頃、母親から聞いた桃太郎の昔話が面白かったから、一席聞かして欲しいと頼みました。圓朝は張り切って演じたのですが、さも不興気な鉄舟から、「お前は舌で語るから、肝心の桃太郎が死んで了っている。」と言われてしまいました。この時から自分の芸に物足りなさを感じ鉄舟に教えを乞いました。鉄舟は「昔のひとは始終、自分の芸を自分の本心に問うて修行した。しかし、どんなに修行しても、落語家は舌をなくさなければ駄目だ。そのために禅を学びなさい。」と言いつけさせ「趙州無字」の公案を授けました。圓朝はこの公案に2年間取組み苦心したのですが、あるとき悟るところがあって再び鉄舟にまみえ、桃太郎を演じました。鉄舟は「今日の桃太郎は生きているぞ。」と賞賛したのです。

のちに圓朝は無舌居士の号を与えられました。圓朝は最初は「ここはひとつ山岡先生をうならせてやろう。」とか「本職としてうまく演じてやろう。」とかの心が、話と一体になるのを妨げ「死んだ桃太郎」になったのでしょうか。禅によって三昧を体験し、本来の自分がみえ、まっすぐに話に入り込むことができ、話と一枚になれたのです。

和尚さんから、禅堂で坐禅に励んでいるとき坐っている自分を感じとることがある、そういう体験をすると圓朝が桃太郎の話が一枚になることが出来たのも、その延長線上に理解できるとのことです。三昧の境地を例えるならば、心理学でフローと呼び、スポーツ選手がゾ

ーンにいるというのがそれに近いのではとのこと。また、坐禅にいられていた脳外科のお医者さんで、手術中に余計なことを考えない、そのために禅をなろうと言う話が池田さんから披露されました。さらに呼吸法、できる限り長い息をする、その為の姿勢や、数息感の教え方もそれぞれに工夫すればよいのでは、との和尚さん、長島さんの話もありました。

三昧は、集中によって自己意識を薄くさせて感覚を柔軟にして、その場その場での自分の働きと一つにしてくれる、自己と環境を一体化して迷いなく生きさせてくれるものようです。

注) お終いの6句は、「三昧無碍の空ひろく 四智円明の月冴えん 此時何をか求むべき
寂滅現前するゆえに 当所即ち蓮華国 此身即ち蓮華国」

注2) 山岡鉄舟：1836年生-1888年没。三遊亭圓朝：1839年生-1900年没。なお、鉄舟、圓朝とも墓所は、谷中の全生庵にあるそうです。

蛇足) 山岡鉄舟の書画はテレビの「何でも鑑定団」で偽物も数多くでてくるほど高名です。

同様に白隠さんの書画も、有名な達磨図を始め、どれも「とらわれない」独創的で内外で高い評価を受けていますが、布袋さんや恵比寿さんを題材に、仏の教えを賛に記した滑稽かつ飄逸な画は思わず、心をほっこりとさせてくれます。和讃の話を伺った後にそれらの画を見返すと三昧無碍の空のようにカラッと晴れて自由自在な心で、庶民にも温かい眼差しを向けた禅師に、少しでも触れられるような気がします。 (文責 中村彰利)